式　辞

本日、島根県立江津高等学校第六二回卒業証書授与式をこのように挙行できましたことを大変嬉しく思っております。また、本式に保護者のみなさまのご臨席を賜りましたことに対しまして、厚くお礼申し上げます。今年度も感染拡大防止のため、出席者の数や時間、式場以外への出入りなどに、多くの制限をお願いしておりまして、誠に恐縮いたしております。高いところからではございますが、ご容赦いただきますように重ねてお願い申し上げます。そして、先ほどは卒業生七一名に卒業証書を授与いたしました。卒業生のみなさん、保護者のみなさまに心よりお慶び申し上げます。おめでとうございます。

さて、卒業生のみなさん、江津高校での三年間はいかがでしたでしょうか。今、みなさんの胸中に浮かび来るものはどんなことでしょうか。みなさんが入学した年の５月から令和が始まり、新しい時代の幕開けとなりました。しかし、２年生４月からの緊急事態宣言の全国拡大と休校措置をはじめ、今日まで教育活動のみならず、日常生活の細かな面に至るまで、世界は多くの制約をともなう社会へと変化しました。私たちは刻一刻と変更されていく制度やルールに、不安や心配、あるいは不満や失望といった多くのストレスを常に抱えて生きてきました。そうした中にあっても、みなさんは本校で勉学や部活動に取り組み、今日のこの日を迎えたのです。「よく今日まで頑張りました」と心から、みなさんに拍手を送ります。

最終学年となった今年度は夏の東京・冬の北京と続くオリ･パライヤーとなりました。開催の是非自体が問われた東京、外交ボイコットの中で開催された北京と、多くの問題を抱えたまま実施された両大会でしたが、出場した選手たちの活躍と言動は多くの人に感動をもたらしました。そこにはメダルの色や数だけではなく、敗退の涙の中にもリスペクトし合う仲間の姿、まだ誰も見たことのない新しい技への挑戦、連覇への重圧と闘った選手を支える友情、急なルール規定変更や厳しい検査による不利益に苦しむ選手への励ましなど、結果ではなく、大会に関わる人々の思いやストーリーそのものに焦点が当てられました。

北京大会が始まる前、あるテレビ番組で、ピョンチャンに続く金メダルの期待がかかったスピードスケーター小平奈緒選手と東京五輪柔道で連覇を成し遂げた大野将平選手との対談が放送されました。小平選手は「自分が何者なのか」を証明したかったという大野選手の言葉に共感し、決意をもって北京に臨む覚悟を表明していました。ピョンチャンの後、不調にあえいでいた小平選手もまた「自分は何者なのか」を求めていたのでしょう。台風一九号被害が出た長野市にボランティア参加したこともその一つでした。しかし、高木美帆選手が千メートルで金メダルを獲得するなど大活躍する中、小平選手は直前のけがもあり、表彰台にあがることはできませんでした。

私は「人はなぜ生きるのか？」と問われるとき、一つの答えをそれは「感動に出会うため」と考えます。その感動とは「自分が何者なのか」を求めて、苦悩の中にあっても真摯な取組を続けた人の生き方そのものに出会う喜びです。また、そうした感動を分かち合い、お互いに支え合うことのできる仲間との出会いです。そうした感動に出会いたい、自らが味わいたいという思いは生きる力を漲らせるものです。

郷土都野津の偉人として語り継がれる佐々木準三郎さんも、都野津小学校の移転増築や現在記念館となっている旧都野津町役場の建設に多額の寄付を行ったという業績だけで尊敬

を集めているのではありません。読書好きだった彼が父親から「漁師の子供が本なんか買わんでもええ」としかられ、家を飛び出してアメリカに渡ろうとした志にはじまり、成功した後は郷土島根と日本のために懸命に働いた彼の生き様自体が感動を生んだのです。彼は当時、日本領だった朝鮮での事業で生み出した富を、朝鮮の人たちのための病院や学校建設などに寄付し、朝鮮の人々から記念碑まで建てられて親しまれました。

本日、本校を巣立っていく七一名のみなさんが、これから本物の感動に出会う生き方を求め、本物の感動に出会われることを願っています。たとえメダルがなくても成功できなくても、感動に立ち会うことができることを忘れないでいてほしいと思います。今、世界には暗く大きな影が広がっていますが、その中にあっても、みなさんの一つ一つの感動が煌めいていくことを祈っております。

最後になりましたが、保護者のみなさまに、これまでの本校へのご支援とご協力にお礼申し上げるとともに、今後のみなさまのご健勝とお子様のご活躍を祈念し、式辞といたします。

令和四年三月一日

島根県立江津高等学校　校長　江川数司